
第3章

場の活用とネットワーク

- “場” がかがやくとき
- 博物館を使おう
- 公園いきいき大作戦
- 観察会・ワークショップに参加する
- 授業だってこんなふうに

コラム たとえば美術でこんなこと
ネットワークを育てるために……

- まず出会いが大切
- ネットワーク活性化のキーワード
- 市民と行政とのかかわり方
- 共に育ちあえる関係づくりのために

“場” がかがやくとき

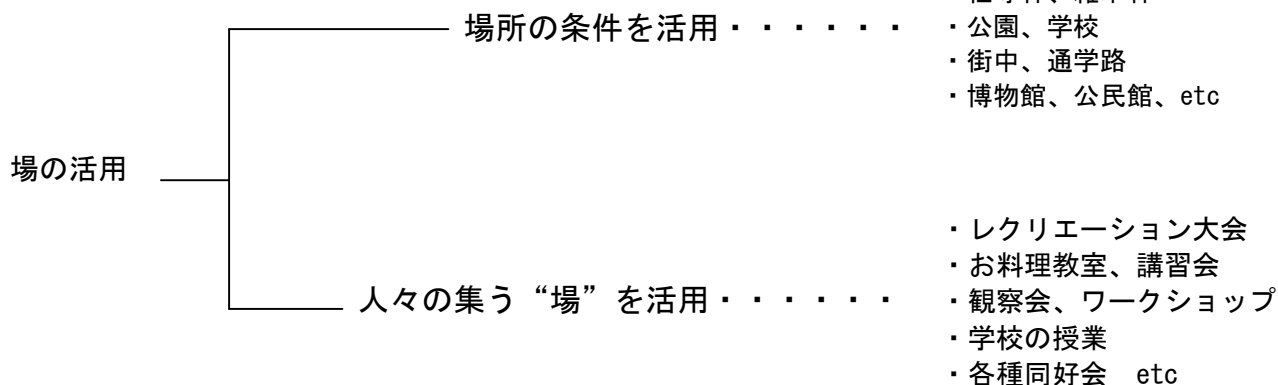
環境学習で活用を考えたい“場”には2つのタイプがあります。ひとつは空間としての「場所」。もうひとつは、レクリエーション大会などに代表されるような「人々の集う場」。ネットワーク作りをすすめる上でも大きな意味を持つ“場”について、ここでは考えてみたいと思います。

スペースからプレイスへ

なんでもないありきたりの「空間」＝スペースを、意味を持った「場所」＝プレイスに変えるには、そこに人と場（環境）の生きた関わりが必要になります。この「空間」を「場」に変える名人は、何といても子どもたち。何でもない草っぱらが宝島になったり、神社の縁の下が秘密基地になったり、タイル貼りの路地が石ケリの遊び場になったり……と、その想像力のたくましさには目をみはるばかりです。



子どもの頃の心おどる遊び場を思い起こしてみると、遊ぶシカケが用意されていたのではなく、わずかな素材をきっかけに、イマジネーションが世界を創りだしていたことに気がつきます。1本の棒切れを、魔法の杖にも、バットにも、飛行機にも変身させる、あの湧きあがるような想像力の源泉は何でしょうか？ それは遊びたい心、すなわち強烈的な欲求・切実性ではないでしょうか。そして、この想像力の翼にさらに力を与えてくれたものは、多様な“自然”、そして一緒に遊ぶ“仲間達”でした。



多様性を活かして

「場」を理解する上でのキーワードは、“空間の条件”と“人”。そして、イメージーションをより大きくはばたかせるためのポイントは、“多様性”と言えます。

人間のためだけではない、多様な生きものが共生しているような場所は、人の心を解きほぐす力と、想像力をかきたてる発見に満ちています。自然の豊かな場所での環境学習が活発なのは、これらの力を味方につけることができるから。自然界の多様性は、人間の心にも働きかけ、率直な、やわらかい感性を呼び戻してくれるようです。

そうはいうものの、自然の豊かな場がなければ、環境学習ができないわけではありません。街は、人間が自分達の快適性を追求してつくりあげたスペース。“自然”という、異種間の多様性とは別に、“人間”の多様化（価値観etc）をテーマにして展開するには、むしろ示唆の多い場となります。自然の中だからそこ可能なプログラムがあるのと同様に、街中だからこそ「気づくもの」「見えてくるもの」「考える素材を提供できるもの」もあるのです。それに何といても、環境に与えるインパクトを目の当たりに体験できるのは、街の中なのですから……。

スペースは、たくさんの可能性を秘めています。宝箱のフタを開けるか否かは、あなた次第。要は、子どもにとっての「遊び場の創造」と同じことです。あなたに切実な気持ちがあれば、どんな場所でも環境学習の場所に変身させられるでしょう。

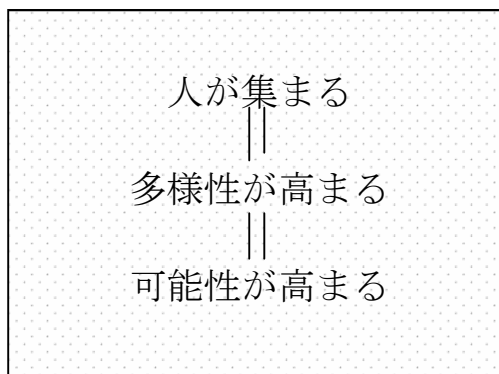
集いの場を利用する

例えばバーベキュー大会で……。

○鉄板を囲んでワイワイガヤガヤ、大皿にのったエビ、カボチャ、牛肉、にんじんetc。目の前の食材のいくつかを取り上げて、産地当てクイズなんていかがでしょうか？みんなの反応を見ながら、もし乗れそうな雰囲気ならば、どんな経緯を踏んでここにあるのか、どれだけのエネルギーを使って栽培されたものか、輸送は？産地の状況は？？？……なんて話しにまで発展できればGOOD！ 自然の景色を楽しみながら、見知らぬ国の食物を口にしながらはずむ会話は、いつもと違った味があることでしょう。

○食後のゴミで、ビンゴゲームも一興。簡単なワークシートをつくり、この会で、どれだけのゴミがでると思うか？「紙製品」「残飯」「ビニール製品」などの順位を当ててみたり、ゴミ袋何杯分のゴミがでるか予想してみたり……ちよつとしたシカケが、宴の後始末への注目度を高めます。

こんな些細なことが、「豊かな暮らし」や「ゴミを出さない工夫」について意識を向けるきっかけになれば、ワンランクアップのレクリエーション大会へと変身。ここから話し合える関係が生まれたら、さらに、可能性は広がることでしょう。



博物館を使おう

『ひらけ、博物館』（岩波ブックレット）という本を御存知ですか？その本を読んだ時、ドキリとしました。なぜって？だってそこに書かれていた博物館の目的が、環境学習の目的にとっても近かったから……そこでこの本を手がかりに、環境学習の展開の場としての博物館や公民館などの、可能性について考えてみようと思います。

展示見学だけが博物館じゃない！

「博物館」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか？「博物館行き」という言葉が象徴するような、ほこりをかぶった古くさいものの陳列……なんていうのは時代遅れ。博物館は知識と情報の集積場として、魅力的な要素をいっぱい蓄えています。

「知っている人→知らない人」的な一方通行の関係をイメージすると、壁が高くなり興味が遠のいてしまうことのある博物館も、共に育む『共育』の視点から見ると、たくさんの可能性をみいだすことができます。

展示物を解説文を読ませるためのものとして限定せずに、展示物を「話題提供のきっかけ」、あるいは「プログラムを展開していくための素材」ととらえるだけで、応用の範囲はグンと開けていきます。1個のジャガイモを肉ジャガにするのも、コロッケにするのも、カレーにするのも、それは料理人のお好みしだい。同じような発想で、1つの展示物から歴史を読み取るか、芸術を論じるか、空想の世界に旅立つかは、料理者である、あなた次第です。仲間と自分が受け取ったものを、交換してはいかがでしょうか。

また、お互いにイメージするものを話しあったり解説しあったりすることは、環境学習でいうと

ころの「自分の頭で考える」「お互いを認め合う」「価値観の共有化」といった要素を兼ね備えた、素晴らしいプログラムの展開ということもできます。

また、実物展示やジオラマ展示は、見えにくいこと、想像力のめぐらせにくいことを、具体的に目の前で示して話ができる、というメリットがあります。この利点を活かし、抽象的すぎて自分のこととしてはとらえにくいことを理解するための助けとしてはいかがでしょうか。例えば「タイムスリップして昔の人の視点で今の暮らしを問い直す」「マルハナバチの気持ちで花を見つめる」

「宇宙的視野で環境問題を考える」なんていうことが可能になるのも、ジオラマ資料等の豊富な博物館ならではの醍醐味でしょう。

知識と情報の集積場としての博物館。まるで「ドラえもののポケット」のような未知のひきだしを開くのは、遊びゴコロにあふれた視点、公民館、図書館、美術館etc、まだまだ知識や情報に富んだオープンスペースは数多くありますよ。



博物館は専門家の宝庫、仲間になれば百人力

せっかくみんなで集まるのなら、もっともっと、自分自身の財産（知識、興味、人間関係etc）を増やせるように、おもしろくやりたいもの。学芸員や研究者は、そんなあなたをお手伝いしてくれる強力な後援者です。なんととっても、その道のプロ。ふつうの人では手にできないような、最新の情報をドッサリ持っています。

たとえば、裏山で観察会をやろうと思った時、植生から、川の水質、歴史、そこでどんな生きものがいるか、人とどんなかかわりを持っている場所なのか……あなたが伝えたいことを相談してみましよう。きっと、あなたが思いもかけなかったポイントを、教えてくれることでしょう。

いい専門家（研究者）は、きちんとした適切な道しるべを示すことができるもの。たとえそこではわからない問題であっても、「それならここに行けばいいよ」と、どこでどんな資料が手に入り、誰に聞けばわかるのか、アドバイスしてくれることでしょう。わたしたちが足踏みしてしまうのは、どこにいけばこんな情報が手にはいるのかわからないから。はじめから「国立〇〇研究所」に問い合わせるのは難しいけど、博物館の専門家がつけてくれた道すじをたどれば、BIGな出会いも夢じゃない！地球環境しかり、水問題しかり、廃棄物しかり……そんな心ときめく人との出会いは、人生の宝物。みんなのための下調べ？いえいえ、一番トクをするのはあなたなのです！

公園いきいき大作戦

公園でプログラム実施を考える時の視点を探ってみましょう。

公園はみんなのオープンスペース

とても当たり前のことですが、まず、これを意識することが、きっと一番大切なことなのでしょう。いざ、環境学習のプログラムを展開する立場になると「一体、どこでやるの？」という？が出てきます。この？に、ある程度希望の光を与えてくれるのが公園なのです。

公園は「みんなの場所」です。散歩をする、お弁当を広げる、昼寝をしに来る、走りまわって遊ぶ……などなど。公園は、屋外でのさまざまなレクリエーション活動や教育活動、災害の防止、環境保全などの場として設置されたものです。もちろん、私達がやろうとしているプログラムを公園で展開することだって、基本的にはOKのはずです。

ですから、「公園を使うことができるんだ」ということを再認識しましょう。昼寝をしたり、お弁当を広げるだけが、公園の利用法じゃない！。周囲の人の視線が少し気になるかもしれませんが、自身を持って、プログラム実施の場として活用しましょう。

公園を使って活動することで、他の公園利用者の方の中にも、興味を持つ人があらわれるかもしれません。「他の人がいる」ということは、アピールの場としても有効なわけです。

プラスの視点を持つ

町なかのちいさな児童公園（現在では、正確には街区公園と言います）から、国立公園などの自然あふれる公園まで、一口に公園と言ってもたくさん種類があります。公園を大別すると、「自然公園」と「都市公園」という2つに分かれますが、「自然公園」にしる「都市公園」にしる、公園でのプログラムの実施を考えた時、どのくらいの要素をそこから拾い上げることができるかが重要になってきます。

「自然豊かな公園でないから」とか「環境学習のための施設がないから」と、あきらめてしまうのではなく、その公園にどんな宝物（要素）があるのか、「あることさがし」をしましょう。

「ブランコがある」「木陰のベンチがある」「ツツジの植え込みにクモの巣があった」「鳥の巣をみつけた」「赤く色づいている木の実があった」「ゴミを拾っている人がいた」……など、私達自身が、その場にある要素をきちんと捉えることで、「できそうなこと」が見えてくるはずで、「でも、身近な自然を知りたいと思って公園に行っても、植えてあるのは外国産ばかりで……」と嘆くばかりでは発展はありません。例えば、「どうしてはるばる海を越えてまで、運ばれたのか？」「その木の原産国はどんなところだろう？」「公園で世界とのつながりをみつけよう！」などというのは、外国産の樹木だからこそ持てるテーマ、日本産の樹木でないなら、逆にそれを活用しましょう。マイナスからの発想ではなく、どんな要素も拾い上げる気持ちで、その公園を見つめましょう。それが、公園でのプログラムの可能性を広げることにもなるのです。

まきこもう

公園を使ったプログラムでは、そこがみんなのオープンスペースであることから、他の人達との関わりというものが生まれます。公園を利用しているたくさんの人達の中には、地域に暮らす人ばかりでなく、まったく偶然に立ち寄った遠方からの利用者もいるはず。地域の人ばかりでなく、遠方からの利用者の人も、一緒に活動に引き込んでみてはいかがでしょうか。

また、公園には、利用者がいつも気持ち良く公園を使えるように、管理する人達がいます。「公園管理者」と呼ばれるこの人達とよい関係を作ることによって、公園でのプログラムはよりふくらみます。ひっそりと活動するのも一案ですが、せっかくだから、どんどん仲間になってもらいましょう。

人の輪を広げて活動すると、1人、2人での活動よりも、多くのアイデアが出てきます。さらに専門的なアドバイスを得られたり、人を紹介されたりと、たくさんイイことがあります。

こうして、地域に暮らす人が中心となって、さまざまな人をまきこんで活動することで、地に足のついた活動に成長していきます。そんな時、公園という活動場所は、単なる活動の場としてだけでなく、みんなの交流スペースや拠りどころ(たまり場)にもなることでしょう。



例えばこんなこと

既存の施設を、そのまま使ってプログラムを展開することばかりでなく、利用方法そのものから発想を転換してプログラムに活用することもできます。例えば、公園内にある遊具(鉄棒や木製の遊具など)は、ASE'S (P. 81参照)や身体を使ったグループワークのプログラムに活用することが可能です。

一方、公園にある既存の施設を利用するばかりでなく、公園という場そのものをみんなで創りあげるようなプログラムも、人とのつながりの中でなら可能になっていきます。

ある児童公園では、地域に暮らす人が、大好きな「空き地」がいったいどんな公園になってしまうんだろう?と、気になり、行政の担当者に電話をしたことが、その後の公園づくりや、公園完成後のさまざまな活動をすすめるきっかけになっています。そこでは、地域の人達だけでなく、すべての利用者自身が、自分の庭と同じ様に公園の草を刈ったり、ゴミを拾ったり、池を作ってみたりというように、公園を自分の場として楽しんで使っているのです。

公園の多くには、「きまり」という言葉で書かれた規制がたくさんあります。そして、いつの間にか、「きまり」が作り出す無言の規制に縛られたり、慣れきってしまったたり、一定の活動だけしかやってはいけなような気持ちになってはいませんか?

公園を環境学習の場として使うことで、新たな疑問や、わくわくする心が生まれたら、それも1つのプログラムと言えるでしょう。

観察会・ワークショップに参加する

講座、研修会を3倍楽しむ方法

自分の興味ででかけるのですから、積極的な姿勢で臨みたいもの。講義をうけるなら、もちろん最前列で！。知らないから、あるいは知りたいという興味があってこそその参加ですから、遠慮することはありません。どんな講座だって、話し手に近い方がおもしろいに決まっています。

さて、目の前で話をする人に注目しましょう。講師をつとめるくらいの方ですから、その道のプロ。ひとつの話の裏には膨大なウラ話、オモシロイ体験が数多くあり、その人自身、たくさんの、心踊るものたちに胸はずませたからこそ、今、あなたの前で話しているはず。それならば、そんなオモシロイことを、聞かずにおこなうなんてもったいない話だとは思いませんか。

講義といえども、人対人のコミュニケーション。講師と参加者のキャッチボールでつくられていくものです。つまり、決まりきった話で終わらせるか、とっておきの話を聞きだせるかは『あなた』しだいということです。あなたの目の輝きや表情で、講師の話の質は変わってしまいます。誰だって自分の話に関心をもってくれたらうれしいもの。もっと話したくなって、もっと関心をひきたくなくて、もっともってこんなにオモシロイ世界もあるんだよ……って、聞かせたくなるものです。そんな「とっておきの話」を聞き出すためにも、ぜひ「最前列で」「気持ちを向けて」講師の方と対することをおすすめします。



さらにもう一步すすめてみよう

次は、質問することをおすすめします。ここでもう一步ふみだしてみましよう。

これは、会の時間中に発信できればそれでもいいし、勇気がなければあとから個人的にでもいい。ぜひ、質問することをオススメします。質問は、そこでの流れをしっかりと把握していなくてはできません。受け身になりがちなこのテの講座の中で、「質問」というハードルを自分に課すことで、与えられるだけの立場から「みずからすすんで」という立場に転換させることができます。どんなことでも受け身でいてはオモシロサは半減します。『自分が』の主体性をもってかかわってこそ、こころ浮き立つオモシロサを発見できるものでしょう。それに、質問に答えてくれる時はまさに、講師の人は『あなた』に向けて話をしてくれます。こんな個人的なつながりが、人をいきいきさせるエネルギー源になるのではないのでしょうか。

できればもう一歩…

そこでいよいよネットワークの出番です。

ひとつは、この時の講師、主催者の方々とつながりです。専門家の持っている知識・情報をはじめとするエネルギーは膨大なもの。この機会にあなたの興味をそそった素敵な世界の持ち主と、知りあいになりましょう。

もし、休憩時間や講義の終わったあとに時間がとれるようなら、講義の話題を中心として疑問に思っていること、今日の講座の感想やお礼などを話せるといいですね。「こんなことに興味がある」「こんな話を期待してきた」「こんな点がとてもおもしろかった」……といった話はずませることで、講師の方も一方通行の不安から解消されますし、あなたも興味をより広げることができます。

時間がとれない時には、手紙もひとつの手段です。文章にすることで自分の心の動きをつかむことができるし、コピーして手元に置けば講座の資料・記録としても残ります。ネットワークのために必要なことのひとつに、「素早い対応」があげられますが、まさに時を得た手紙というのは、人の心に響くものです。手紙を書くのに、構える必要はありません。あなたが思ったこと、感じたことを素直な気持ちで手紙に託して届けましょう。時には思いがけない丁寧な返答を返していただけることもあり、それだけでとても豊かな気持ちになれます。魅力的な知り合いを多く持ち、ネットワークを広げることは、生きることの幅をグーンとひろげてくれることでしょう。

もうひとつのつながり、それは、この講座に参加した参加者同志のつながりです。ここで、同じ時間を過ごすなんて、それこそ何億分の1の確率かもしれません。そんな確率をくぐりぬけ、同じテーマにひかれて集まれたなんて、幸運なことだと思いませんか？ この縁をムダにするのは、あまりにも惜しい気がします。

もし連続講座やワークショップ形式のもので、全体に高まるものがあるのなら、講師や主催者を巻き込んで、新しい集まりをつくっていくのも一案です。そこまではいなくても、なんとなくニコッと目のあった何人かと一緒に、お茶やお酒でもいかがですか？ 講座の感想を。みんなでワイワイ話し合うことで、きっと魅力的な関係が生まれることでしょう。

ひとつのテーマを切り口に集まった仲間とは、職場や近所では話のきっかけがつかみにくいような話題、たとえば「地球環境についてどう思う？」とか「ゴミの分別についてどう考えてる？」といったことが、不思議と気軽に話しあえるものです。こうやっていつもとは違った話題をくりひろげることで、違った刺激を受け、意識できなかった解決策を見つけられるかもしれません。そんな中から、自分なりの『よりよい暮らし』を、練り上げる手だても、きっと、発見できることでしょう。



授業だってこんなふうに

環境学習公開授業レポート

学校教育の現場では、どのような取り組みがなされているのか、県の環境学習モデル校である市原市立内田小学校で行われた研究授業発表会の様子をレポートします。

研究主題：ふるさとを愛する心を育て地域に根ざす環境学習

指導方針：「ふるさとを愛する心を育む」

現在、身近な環境問題だけでなく、世界レベルでの環境問題の発生と、その対策が真剣に模索されています。しかし、自然が豊かだ、環境が良い、とされている所では環境問題に対する意識が低く、また身近にある豊かな環境に対する認識もそれほど高くない実状です。

内田小学校では、環境の良い所でも真剣に環境問題と取り組み、実践していく必要があるという考えに基づき、「環境がよい」地域にある学校として、子供達が自分達のふるさとの環境に関心を持ち、認識を高めること、また家庭や地域のつながりの中で、相互に認識レベルを高めていくことを方針として活動を始めました。

授業見学：内田川に魚をはなそう……5年生

単元の目的

内田川は、小学校の裏を流れている川です。自然に恵まれた地域で子供達は自然を身近なものとして捉えているはずでしたが、その豊かさや変化についての気づきは少なく、実際は悪化しつつある環境に気づいていませんでした。この単元では、自分の身近な環境の変化を、内田川の観察や調査を実施することで事実として認識し、環境を自分との関わりの中で意識を持ってとらえられるようになることを目的として展開されました。

授業全体の経過

1) 川の様子を観察 (2時限)

ねらい：現在の川の様子をとらえる

2) 川の清掃と内田川・島田川に注ぐ入口を観察する (2時限)

・生き物が住めるか、どんなごみがあるか、入り口付近はどのようになっているか、観察する

ねらい：生き物が住める川とはどんなものかとらえる

3) 内田川マップ作り (2時限)

・ごみの様子、排水口の様子などを描きこむ

ねらい：内田川の観察結果をまとめる

4) 廃油せっけん作り (2時限)

・家庭の廃油からせっけんを作る

ねらい：ごみの出ない工夫を考える

5) 川の様子を観察する (2回目、2時限)

・ごみ、水の色、流れの様子などを観察する

ねらい：1回目の観察の時と比較する

6) 内田川のマップ作り (2回目、2時限)

・ごみの様子、排水口の様子などを描きこむ

ねらい：今回の観察の結果をまとめる

7) 廃油せっけんで洗濯をする (1時限)

・水の様子、あわの様子などの観察

ねらい：合成洗剤などと比較する

8) みんなに呼びかける方法を話し合う (1時限)

・観察結果 (マップ)、洗濯などの結果からどうしたらいいか考え、話し合う

ねらい：実際の行動に移すためのプラン作り

- 9) 具体的なプランに基づく発展(2時限)
・話し合った結果出たプランを表現・実行する

ねらい：授業全体としてのまとめ



公開授業・進行レポート

「内田川に魚をはなそう」の單元には、社会や家庭科などの時限から全部で16時限が費やされました。この日の授業は、8回目、14時限目にあたります。

内田川をきれいにするにはどうしたらよいか、みんなに呼びかける方法を話しあう。

ねらい：実際の行動に移すためのプランづくり

導入：以下1)～4)

- 1) グループに分かれ、現在の内田川の様子をVTRで見る
- 2) 清掃前・後の内田川マップを比べて気づいたことを話しあう
- 3) このままだと川の生き物はどうなるか、話しあう
- 4) メダカ(クラスで卵から育てたもの、内田川に放流する予定)が川で安全に暮らせるようにするために、私達はどうしたらいいのか?(問題提起)

展開：5)～7)

- 5) 自分・学校・家庭で、メダカのためにできそうな事を個人で考え、リストアップする
- 6) 個人のリストアップをもとに、グループでできそうなことについて話し合う
- 7) 班で話しあったことを発表する

まとめ：8)～9)

- 8) 学級で取り組めることは何か話しあい、取り組めそうなものをいくつか決める
- 9) 次回の計画をたてる

授業の進行状況

VTRを見たり内田川マップを見比べたりして、清掃を行ったのに川のゴミが一向に減っていないことや、ヌルヌルした排水口のことなどを、子供達は鮮明に思い出したようでした。川に出かけ「なんて汚いんだ!」と驚き、「よし、それなら」と清掃活動を行ったにもかかわらず状況は改善されなかったという事実を再認識することは、気持ちの上で非常にシビアなものですが、重要なことです。

「このメダカが安心して暮らせるような内田川には、どうしたらなるんだろうねえ」という先生の問いかけに、子供達は真剣な顔をして考え込んでしまいました。教室の水槽にいるメダカは、卵の時から子供達が大切に育てたものだそうです。

「今までに2匹死んじゃったんだ」「事故だったんだよ」と言う子供達の表情から、メダカを川に放してあげようと一生懸命に育ててきたことがわかりました。リストアップした用紙は、自分自身・学級・家庭の3つに分かれており、それぞれの欄に、出来そうな事を書き込むようになっていきます。

いくつかを覗かせてもらったところ、自分自身については、比較的書かれているのですが、学級・家庭の欄の書き込みには、かなり悩んでいるようでした。個人レベルでは目標を立てられても、集団に対しての目標をたてるのは容易ではなかったようです。また、実際に自分達が取り組んだ結果、現状を変えられなかったことも影響しているのでしょう。

個人の書き込みをうけてのグループ討議は、やや静かに行われました。お互いの用紙を見比べている子、みんなの意見をグループの用紙に書いている子が多く見られました。活発に意見を交換するというより、“何かいいアイデアは出てないか?”、“あんなこと書いちゃったけど、良かったのかな?”とドキドキしながら、用紙を見比べているという印象を受けました。

各グループからの発表は、意見数こそ少なかったものの、「学校に川の浄化槽を作る」、という直接的な行動につながる意見や「川について、もっと細かくいろいろな事を調査して、結果を発表する」という科学的な意見、「ポスターを作る」「看板をたてる」といった呼びかけを重視する意見などが出されました。

提案されたそれぞれの意見に、子供達は共感を持ったり、“すごいなあ”と認めあったりする様子が見られました。この日は、次回に向けて計画をたてるころまでは進めませんでした。意見発表を行って、お互いの考えを分かち合い、次回への下地を作ることは出来ました。

授業展開については、この日は指導者の考えていた「環境新聞をつくる」というような意見は出ませんでした。それを押し付けることなく、子供達を励ましながらか、意見をどんどん引き出すかたちで、展開していったことは大変すばらしいと感じました。

出される1つ1つの意見について、その意見を出したグループに確認を取りながら、他の子供達にわかりやすい解説を加える配慮や、「そうか。そういう考えもあるんだねえ。先生、思いつかなかったよ。」と対等で誠実な感想をあらわし、子供達の気持ちに自身を与え、発表してみようという意欲をわかせた発言は、「共に学ぶ」という環境学習の理念を具体的に示しているという印象を受けました。

レポーター 竹市幸恵

日本環境教育学会

「学校教育ネットワーク千葉事務局」の紹介
「学校教育ネットワーク」は日本環境教育学会の中の研究グループです。千葉県で、環境教育に取り組む小中学校教員を中心に、実践交流を中心の活動を考えています。
〒285-0863 佐倉市臼井1530 佐倉市臼井中学校内
善財 利治 TEL 043-489-5635

コラム ～たとえば美術でこんなこと～

今日は写生大会。「それぞれ好きな場所で絵を描くように」と言われても、適当な場所が決まるまでに1時間、その気になるまでに1時間、あとは駆け足で仕上げハイ！……こんな経験は、どなたにもあるのではないのでしょうか。いったいどこが感性を高める授業なんだろう？と疑問に思えてきます。

そこで、ひと工夫したいと思います。まず、絵を描きたい！と思うのはどんな時でしょうか。……思い出して見ましょう。感激した時、強い関心を持った時？ハッと感じた時？……心が揺り動かされた時に、なんだか無性に自分なりの表現を試みたくなるものだとは思いませんか。それなら、そんな場を設定してあげてはどうでしょう。子どもたちが自分で絵を描きたい！と思うような設定を……。

たとえば、木をテーマに絵を描くなら、まず外にでかけて木といっしょに思いっきり遊んでみましょう。目隠しをしてどの木か当てっこを試みたり、グループでワイワイやりながらの“気になる木”を行ってもいいと思います(P.106参照)。木の葉や木の実を集めたり、幹にさわったり、よじ登ったり、森や動物たちの物語をつくってみたり……ただなんとなくブラブラしていた時間が、なんだか心ときめくワクワクした時間になります。木と自分との距離が近くなって「わたしの木」への思いが高まってから、気持ちを表現できる機会が与えられれば、きっと夢中で思い思いの絵を描きあげることでしょう。

環境学習……むずかしく考えなくても、こんなちょっとした心の動きに配慮すれば、いくらでも機会は広がっていくと思います！

無意識の広大な海の底からわきのぼってくる
その素晴らしいエネルギーを
「自己実現への意思」と呼ぼう。
すべての人間に備わっている、この成長力…
たとえ、その力が、どんな微小であり
ときに朽ち果てているようにみえたとしても
涸れたかにみえるその井戸からは
いつか必ず清冽な水が湧き出してくる。
幾年月もねむりつづけた種が
時を得ていつの日か、花ひらくように。
人は、ある日
成長への一歩をふみださずにはいられない。

松井洋子「ワークは人生をおもしろくする」
1991.アニメ2001より

個人で…みんなで…

ネットワークを育てるために……

「まず自分のことをしっかりやるのが先決。それで余裕ができてきたら他の人とも……」。そんな考えの人も多いかと思います。しかし、“自分”にとらわれていては、決して見えないこと、わからないことがたくさんあるのも事実。

例えば、1章の最後のワーク「地球への恩返し」を思い出してみましよう。このワークで「これで絶対いいぞ」と思っていた判断が、他の意見を聞くうちに、こっちのほうが「もっといいぞ」と思い直した場面もあったことでしょう。「ひとり」では達することのできなかつた考えに至る、あるいは、解決できそうな問題が解消される……。集まる人の数だけ発想は豊かになります。可能性がふくらみます。そして、なによりも「みんな」でやることは、おもしろい！やっついこうという“その気”を大きく育ててくれます。

そして、もうひとつの可能性は、ひとりだけでは行きづまってしまうことでも、仲間がいれば乗り越えられるということ。例えば個人的に古紙のリサイクルをはじめても、時にめんどうになって、そうこうしているうちにな～んとなく興味がそがれてしまっ……。どこかでよく耳にする話ですが、グループとしてのかかわりあいがあれば、例え自分が息切れした時でも、隣人の元気な姿に影響を受けて目的を見失うことなく立ち戻れるものです。リサイクルという目的+ α ・人対人のおもしろさ&他から刺激も受け続けることで、パワーを再充填してもらえます。その結果、興味を継続・発展させることができ、より自分の気持ちに沿った暮らしができる……。

「みんなで」と「個人で」を分けて考えないで、一緒にすすめていきましょう。なぜならば、どちらも切り離すことはできない大切な“日常”なのですから。環境学習は何も特別な活動ではありません。「他のものたちに、どれだけ思いを馳せることができるか」「どれほど想像力をめぐらすことができるか」、「自分のこととして問題をうけとり、解決に向かうことができるか」そして「いかに日々いきいきと暮らしていけるか」、そんなテーマで取り組む、ごく日常的なことなのです。

……というわけで、ここでは“いきいきと暮らすための仲間づくり”＝“ネットワーク”をキーワードに展開していきたいと思います。

まず出会いが大切

相手への過度な警戒心から、その場の雰囲気が悪くしてしまうことはよくあることです。お互いのことをよく知りあっていれば、もっともっといい話しあいができるのではないのでしょうか。そんな気持ちから、こんな出会いの方法をご紹介します。

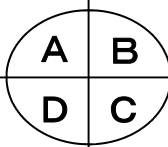
四つの窓～自己紹介シートを使った方法～

- 目的)
- ・この場にどんな人が集まったのか、好奇心を満足させ不安を取り除く
 - ・誰もが話の場に参加できる「はじめの一步」の機会をつくる
 - ・基本的な「聞く雰囲気」「話せる雰囲気」をつくりだす
 - ・自己紹介および考えを文字にすることで、意識を向ける
 - ・文字に表したものを、お互いに見せあうことで、より人の個性を知ることができる
 - ・和気あいあいと話をする雰囲気のままに、話しあいを始めることができる

- 用意するもの)
- ・A 3程度の画用紙（自己紹介シート記入用）
 - ・細マジック

- 手順)
- ・集まったメンバーに画用紙とペンを選んでもらう
 - ・用紙への記入方法を説明する
 - 1) 用紙に+線を書き、4等分して4つの窓をつくる
 - 2) Aの場所を指定して、書いて欲しい内容を伝える
 - 3) だいたい全員が書き終わったら同様にB、C、Dと進める
 - 4) 全て書き終わったら、用紙を見せながら書いたことを順番に発表していく。この時の発表のしかたは番号ごとの紹介、つまり全員がAを発表し終わったら次はBに……という具合に進めていく

自己紹介シート・4つの窓、記入例

○名前 ○自己紹介、現在の活動、 興味etc		○嫌いなもの、欠点（3つ） ○好きなもの、長所（3つ）
○環境学習に期待するもの		○生活信条 （大切にしていること、大切に にしたいと思っていること）

*あとから書き足しても構わないが、その場合は色を変えて……というルールにするとよい。

*ひとつのグループは6名位がよい。10名を越えるようなら、2グループに分かれて行なったほうが活発な意見交流が期待できる。

参考：「教師業ワークブック」1989, 黎明書房

経験者が語る ネットワーク活性化のキーワード

おもしろい集まりにしたいナ！…活発な活動のためのワンポイント

現在、とても魅力的な地域活動をされている「江戸川環境ネットワーク」代表の平松南さんから、地域での活動を活性化させるためのキーワードを、いくつかいただきました。かかわる人のタイプによって、その活動のスタイルは違うものですが、ごく自然体で活動に接している平松さんの言葉は、示唆に富んだものが数多くあります。このまま『平松方式』の真似をすすめようというわけではありませんが、あなた自身のいきいきとした活動のための『ヒント』がきっとあると思います。いただいたキーワードは、ベターハーフ・遊び感覚・多孔質・ルールレスorファジー・行政は人材の宝庫・羞恥心・不完全さの演出・キーマンを探せ・記録こそが蓄財・職域ネットワーク・地元人名録の作成・メディア対策・助成団体へのアクセスetc.ここではそのいくつかをご紹介します。

ルールレスorファジー

地域活動は、タテ割り社会やゲゼルシャフトではなく、ヨコ社会、ネットワーク社会である。参加する人々はすべて平等であり、会社での肩書は全く役に立たない世界。そこでは、自らの情熱、意欲、所有する技術を地域社会に役立てようという奉仕の精神、未知の他者と共に一つの目的に向かって進もうとする協調性……そうしたものが、地域活動でのその人の価値を決めていくのである。会の評価も、立派な会則にあるのではなく、実践活動の中にある。会則をつくって逆に官僚的になったり争いが起きた会を見てきた私は、会の運営にあたり、あえて会則をつくらなかったことがあった。しかし、とりたてて問題もなく円滑に運営されてきた。会員誰もが参加できるオープンな定例のミーティングで全ての討議・決定がなされ、アクションプランは言い出した者が中心となって負っていく。このシンプルなやり方で充分であったし、何の矛盾も起こらなかった。会則はつくるべきではないと言ったら言いすぎだと思うが、会則で趣旨と設立の目的ぐらいが明確になっていればよい。行動を起こしているうちに、組織には自ら不文律が生まれていく。そしてこの不文律こそが最も価値のある会則なのだと思う。

行政は人材の宝庫

夏を快適に過ごすためクーラーをいれる、車を使って移動する…これらは、温暖化や大気汚染をもたらす深刻な環境問題となっている。個人は被害者である一方、加害者でもある。さし迫った地球環境問題の解決のためには住民も行政もない。当然行政と市民は、立場上は一線を画して当たり前である。しかし環境問題など立場を越えて協力しあう必要のあるものについては「批判は自由に、協力は密に」の原則でいくべきであろうと思う。

現在すすめている地域活動では、行政と意図的に接点を求め協同作業をしている。今おつき合いしている人々はいずれも自分達の職務に誠実で、住民に対しても分け隔てなく力を貸してくれる。私達が自分の持っている技量や情熱を地域に向け、それを行政がバックアップしてくれる。私達は行政の応援団ではなく、批判の自由とフランクな協力が原則のパートナーであると考えている。このパートナーシップが充分に発揮できるような住民と行政との関係があると、その地域の福祉や環境は向上していくと思う。行政の力を“利用”するのではなく、大いに“活用”すべきであり、利他のために行政の力を引き出し、地域社会に貢献すべきである。それが、タックスペイヤーとしての税の上手な活用法ともなる。

あそび感覚

反対闘争的な主義主張の強い活動家には“べき”思考が多すぎるように思う。それで広範な人が集まり、活性化し、実績をあげ、長続きするのならよいが、そうではないから、みな工夫するのだ。あそび感覚もその工夫のひとつである。“あそび”がなければ機械でも自動車でも傷みが早く、寿命が短い。とは言っても真面目感覚のない運動に、あそび感覚のみが印象づけられていくと、これまた軽薄な運動に受け取られ、特に問題意識をもって誠実にやっ払いこうという人達にとっては耐え難い。あそび感覚は本来、環境問題や福祉教育などシリアスなコアがあってはじめて光るものであって、堅いコアがなくて楽しいだけでは、「なんだあの程度か」と一瞥もされなくなってしまふ。

川沿いの桜並木を保存する会で、最初に私が手がけたのは「桜並木を走る市民ジョギング大会」であった。賛成・反対というより、まず多くの人にこの桜並木のよさを知ってもらうことが先決。桜土手が、花見以外にも楽しめることを参加者が肌で感じることに、そのことを大切にしようと思ったのだ。その後も、自然観察会をやり、パネル展示やバザーという風に、シブアーな側面をあまり強調しないように楽しくソフトな活動を心がけていった。もちろんハードコアの必要は感じていた。しかし、会の活動に多くの住民の関心を向けることができたのは、あそび感覚を大切にされた成果だったと思う。



ベターハーフ

人間1人だけの魅力も、1人でできる活動範囲もたかが知れている。そして、いくつもの個性が綾なして、多彩な性格をつくっている組織は魅力がある。「人生の好伴侶」という言葉があるが、「地域活動の好伴侶」をつくれるかどうかは、活動をより魅力的にすすめていくための重要なカギであろう。一番のパートナー候補者はあなたの「つれあい」。なぜなら、長所も欠点も知り尽くしている格好の相談相手であるからだ。また、向かっていく共通の目的は、より緊密な関係をはぐくんでくれる。共通の話題も多くなる。何より友人達は2人共通の友人であるから、活動も人生もグンと楽しいものにしてもらえること受けあいだ。

多孔質

多孔質というのは、入口がいくつもあることだ。自然保護や環境保護、まちづくり運動などは、できるだけ多孔質になるよう心がけた方がよい。なぜなら、まちは、サラリーマンもいれば主婦もいる、落語好きのお年よりからロック三昧の若者まで、実に多様な人々によって構成されているからだ。無関心な人を関心のある人にするためには、多様な人々が参加しやすい受け皿を十分に用意する必要がある。真面目一本調子でも遊びっぽいカラーだけでも、広がりある活動にむすびつけることは難しい。

しかし、多数の入口に多数の出口では、歩止りが悪くなり、何のために間口を広げているのかわからなくなってしまう。目的は多様な人々の参加を促し定着させること、そのために出口をひとつにすることだ。入口は複数、出口は一つ。そしてその出口は、自然保護、環境保全の精神的バックボーンをつくっていく道へ通じるように工夫することだ。

市民と行政とのかかわり方

市民と行政ってどんなにかかわり方ができるの？行政側の考える協力関係ってどんなもの？ネットワークのしめくりは、環境行政に携わる行政マンの言葉。いくつかのポイントを御指摘いただきました。

市民と行政が連携するには

市民運動の主体はあくまで市民であり、行政が運動そのもののイニシアティブをとることは好ましくなく、行政は市民の主体性を尊重しながら市民の行動を支援していくことが大切だと思います。そのためには、市民が果たすべき役割をできるだけ明確にしたうえで、それぞれの特徴や長所を活かしながら協力していく必要があるでしょう。例えば市民が身近な環境に興味を持ち、それを良くしていこうとするととき助けてほしいこと、困ったこと、分からないことがいろいろ起こってきます。専門的な疑問に答えてもらいたいとか、集会やイベントに行政の広報や後援などの援助を借りたいといったことです。こんな時どうしたらうまく協力が得られるのでしょうか。

環境づくり支援システム

身近な環境づくりでは、行政の持つノウハウや理念が、一方的に市民の側に伝えられるといった、一方的な流れのシステムではなく、また行政の都合のいいように市民を巻き込むだけのシステムでもありません。市民グループと行政が、お互いが教えあい学びあうという相互依存の関係に媒介される、「双方向の機能を持つシステム」が求められているのです。このシステムを作り上げるためには、以下の6つのサイクルが必要と考えられます。

- 1) 自覚から実践にいたるサイクル
- 2) 情報提供と交流のサイクル
- 3) しくみづくりとその活用のサイクル
- 4) イベントの開催や広報・啓発などによる意識向上のためのサイクル
- 5) 組織づくりとその活性化のためのサイクル
- 6) 民主的な意思決定・政策決定のサイクル

行政と上手なつき合い方

○目的を明確に

何を目指し、何をしたいのか、どの部分で協力してもらいたいのか、と言った点を整理して、要求を正確に伝えてください。

○信頼関係を大切に

担当者と何度も話し合いを重ね、連絡を密にとりお互いの信頼関係を築き上げましょう。

○相手の立場を理解する

それぞれの立場を理解し、性急に結論をだすことばかりを求めずに、仮に考え方が違う場合でも、どうして食い違っているのか、お互いに歩み寄れる余地がないのかよく話し合う必要があります。この際、お互いが一方的な要求にかたくなにこだわると、議論は平行線をたどり実りある結果を期待できません。建設的に、粘り強い姿勢で対することが求められます。

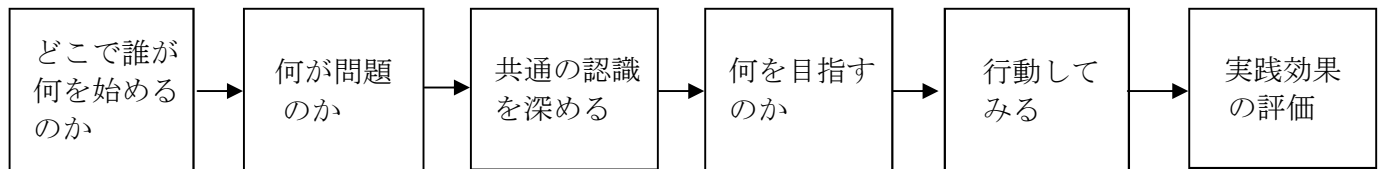
○目的は同じ

市民グループも行政も、目指すところは地域の改善と向上です。そのことを念頭に置き、建設的な議論を積み重ねれば、良い結果が得られることが多いものです。

身近な環境づくりのプロセス

身近な環境づくりの主役はあくまでも市民であり、行政はそれを支援していく体制を整備していくことが必要です。その支援システムは、先の6つの機能を備えることが望ましいと考えます。市民レベルでの身近な環境に対する取り組みが地域に根つき、深まるとともに、環境が少しでも改善され、長い目で見て環境に配慮したライフスタイルが定着し、快適な環境が創り出されれば素晴らしいことです。

最後に、「身近な環境づくり」と「市民グループと行政の特徴」の流れを示しておきましょう。このプロセスを念頭に置きながら、市民と行政が手をつなぎ、互いの長所を組み合わせ、短所を補いながら活動を推進すれば大きな成果が得られるのではないのでしょうか。



市民グループと行政の特徴

	長 所	短 所
市民グループ	<ul style="list-style-type: none"> ○制度にしばられず、自由に活動できる ○活動地域の実情に詳しい 	<ul style="list-style-type: none"> ○組織的に弱く、永続的な活動に不向き ○全体的な考えよりも、地域の具体的、個別的利益を重視しがちである ○活動に必要な情報や資金が不足しがちである
行政	<ul style="list-style-type: none"> ○組織がしっかりしており、永続的な活動に適している ○財源的な保証があり、大きな事業にも対応できる ○長期的、全体的な観点から施策を推進できる 	<ul style="list-style-type: none"> ○法令や制度にしばられ、自由な活動に制約がある ○地域の実情に応じた臨機応変的な対応よりも、画一的な対応になりがちである

参考：盛岡 通「身近な環境づくり——環境家計簿と環境カルテ——」
pp229-252,1986, 日本評論社

共に育ちあえる関係づくりのために

人間的成長と環境学習

東洋思想では、人は知・情・意のバランスをとりながら成長し、それらの相乗効果の中でこそ、健やかな成長が可能になると言われています。これは、人としての成長と環境学習の発展段階との共通性を表す言葉のように受けとれます。すなわち人の成長でいう

知は=環境学習についての知識 (a b o u t)

情は=豊かな自然の中での活動 (i n)

意は=環境のための視点 (f o r)

……と言うように。

(P 6 参照)

こうして考えていくと、人が本当に環境のことを自分のこととして思いめぐらせるようになるためには『知』以外の要素、ここで言うところの『情』『意』への働きかけはますますもって不可欠な要素であることがわかります。そして、これらはお互いがバランス良く補完しあってこそ、発展的で豊かな未来が開けていくものと考えられます。

『情』：心ゆさぶられるような豊かな自然体験の必要性。

いくら「鳥について」の知識を学んでも、本当に心あらわれるような美しい鳥の声を聞き、姿を見たことのない人には、自分と鳥との関係に思いをはせるような糸口がつかめません。

→イメージが湧く。感動を呼び起こす。

『意』：自分の意識としてとらえる視点の必要性。

今までの細切れの知識を、自分の体験（過去・現在・未来）に結び付けていくための視点を与えることで、逆に『知』への欲求も高まり伸びていきます。ヤルに値する目的をみいだせない『知』の学びほど、味気なく、苦しいものはありません。『知』とは別の価値判断が存在することを示し、点数をつけられないもの・モノサシではかれないものこそを重要視することで

「個」が育ちます。

→あらたな価値（視点）発見。

さてここで『あなた』に質問です。

あなたが環境学習のプログラムに興味をもったのはどうしてですか？

あなた自身が環境に対する理解を深めたかったから？

**あなたをとりまく環境（人間環境・自然環境・物質環境）を
良くしたかったから？**

サークル活動を、より活発にしていきたかったから？……

いずれの場合でも、実現のためには誰かの手が必要……他の人とのかかわりを持ってやることになりそうですね。また、さらに環境学習を他の人に対して展開しようとするのは「事実として現状の認識をしてほしい」「それをもとに行動の見直しをしてもらいたい」という気持ちが含まれているように思います。

この知っていることを行動にむすびつけるためには、「イメージを豊かに耕す」と同時に「価値の転換」がせまられます。関係のつながりに気づくことで、例えば今まで「ゴミのポイ捨てをしてもかまわない」と思っていた価値観が、「分別してリサイクルしなくっちゃ」という価値観に変わったり……。また、逆に価値観が変わったからこそ、イメージを広げられることもあるでしょう。

ところがあなたは、自分がどんなものに価値をおいて暮らしているか……ということについて、考えてみたことありますか？自分という内なる環境を知るには、他人という鏡で照らしてみるのが一番！そして、『価値観』をみつめることは、いつもと違った“人の根源的なものに触れる機会”として、心の栄養もタップリあります。他者との価値観の交歓は、思いもかけないようなハッとした出会いが多いものです。

というわけで、ここで人間関係のトレーニングなどで行なわれる『価値観』をみつめるワークを提案します。自分の価値観をさぐる、あるいは他人の価値観に聞き入ることで開かれる“目”は、これから環境学習のプログラムにかかわろうとするあなたにとって、大きな気づきをもたらしてくれることでしょう。

このワークは3～5人で行なうのが最適です。まず、一緒にワークをする人を決めてください。メンバーがそろったらあとの手順は簡単。

- 1) 次のページを人数分コピーして配り、解説に従って個々に記入をします。この時は、個人のワーク、声を出したり相談したりはナシです。
- 2) みんなが書き終わったら、記入した用紙を見せながら話しあいをはじめます。なぜ、この言葉が1番なのか……2番なのか……最後なのか……自分に対しても人に対しても意外な面がいつぱいの、とてもおもしろいワークなので、これ以上の説明はいらないでしょう。それでは、はじめてみましょうか。

わたしの価値観

次の言葉のうちで、あなたが一番『価値』があると思っているもの、最も大変だと思うものを1として、順次2, 3, 4…と順位をつけ、最も価値の低いものを10としてください。たとえ同じ程度のものがあっても、同じ順位はつけずに10までを記入しましょう。順位の後ろのスペースには、簡単に順位づけの理由も書いてください。

	順位	その理由…
仕事	: :	
正義	: :	
愛情	: :	
富	: :	
健康	: :	
自己実現	: :	
名誉	: :	
楽しみ	: :	
奉仕	: :	
安定	: :	

出典：柳原光「Creative O.D.IV」1985, プレスタイム